

# 「死のミルク」

——『ピエール』における「食べる」ことと「書く」こと——

大 川 淳

**Synopsis:** Starting to write *Pierre: Or, The Ambiguities*, Herman Melville originally intended to fabricate a kind of sentimental novel appropriate to the feminine readers. As many critics indicate, however, such a sentimental tone is turned into anti-sentimental. This transmutation echoes the change of what Pierre eats or drinks: “a rural bowl of milk” at the beginning and “death-milk” at the end of the story. Such a food-motif is suggestive of the circular structure of the novel, and the substantial deterioration reflects the transfiguration of Pierre’s self. In addition, it is also noteworthy that Pierre’s appetite wanes as he is immersed in writing a novel. In these lights, this essay analyzes the food motif and the metaphorical relation between the acts of eating and writing, and explores the transfiguration of Pierre’s self.

## 1. 「ミルク」

ハーマン・メルヴィルは1852年1月8日のソファイア・ホーソーン宛ての手紙のなかで、執筆中の『ピエール』(*Pierre: Or, The Ambiguities*)について、「今度、私があなたに託すのは、ボウル一杯の田園のミルクです」(*Correspondence* 219)と書いている。手紙のなかでメルヴィルがいう、「ボウル一杯の田園のミルク」は、サドルメドウズを舞台とする前半部にみられる—当時の読者層の大半を占める女性が好む—感傷小説的なトーンに反映されている<sup>1</sup>。しかし、小説がニューヨークへと舞台を移すにつれて、脱線や哲学的考察が頻繁に起こり、その副題にもあるように、まさに「曖昧性」を読者に突きつけることになる。ロバート・T・タリー・Jr. は、「田園のボウル」は、「健全な家庭のミルクをピエールに与える」が、その「ミルク」は、「結末に至るまでに、ほとんど飲めない毒性の酒へと酸敗する」と論じる(*Tally* 119)。タリーの主張にある「ミルク」から「毒性の酒」への変質

は、『ピエール』の物語の特徴を端的に指摘している。しかし、タリーの論考を含め、これまでの『ピエール』批評史において、メルヴィルが『ピエール』を「ミルク」という「食」のメタファーで表現している理由、またストーリーの変質が、「食」のモチーフを通じてテキストから読み取れることについて、あまり論じられてこなかった。比喩的かつ現実的な意味において、サドルメドウズの「ミルク」によって育まれるピエールが、物語の結末で、「死のミルク」に喩えられる毒薬で服毒自殺をするというストーリーは、「食」を通じた円環構造を成しており、こうしたことから、「食」は、作品において重要なモチーフであると考えられる。

そこで本論では、『ピエール』に散在する「食」の表象が、ピエールの自己をめぐる問題と接続していることについて検証する。また、メルヴィル文学の特徴である、「食べる行為」と「書く行為」の比喩的な関係性を踏まえ、「食べられる」ものとなる、作家としてのピエールの自己の変容を考察する。

## 2. 「食」と聖餐

グレンディニング家の裕福な家庭の様子は、主に食卓を通じて描かれているといっても過言ではない。小説には食卓を彩る豪勢な食事が描写される。また、ピエールとメアリーの会話が、主に食卓を介してなされることも特筆すべきである。食卓は、ともに食事をするものの間に「社会的親交」(*Gigante* 8)を約束するが、それが家族での食事では、食卓は、親が子供にテーブルマナーなどを躾ける、すなわち教育の機会を提供する場となる。ギリアン・ブラウンは、「理想的な家庭」では、食事を共有することによって「軋轢や、不和が解消される」と述べ、この理想は、「19世紀における、母乳育児期の母から子への愛情伝達の図像を端的にあらわしている」と論じる(*Brown* 148)。

こうした「食」の機能は、母メアリーとピエールの朝食のシーンにおいて顕著にみられる。例えば、召使のデイツに三杯のミルクを乱暴に注文するピエールに対し、メアリーは彼の「度を越えた礼儀作法」(18)を窘める。

“Let him [Dates] stay.—Don’t be a milk-sop, Pierre!”

“Ha! my sister is a little satirical this morning. I comprehend.”

“Never rave, Pierre; and never rant. Your father never did either [. . .]. He was always exceedingly gentlemanly: and gentlemen never rant. Milk-sops and Muggletonians rant, but gentlemen never.” (19)

メアリーはピエールを教育する母としての役割を担い、食卓は理想的な家族像を形成する空間として機能する。さらに重要なのは、メアリーのピエールに対する「紳士たれ」というメッセージの背後に、亡き夫ピエール・グレンディニングの存在が仄めかされていることである。食卓におけるメアリーの教育は、夫を理想的な家長に仕立て上げ、ピエールをサドルメドウズの後継として相応しい者にすることを目的とする。ピエールの自己は、血統と家庭から支配を受けつつ、それによって形成されることが、この食事のシーンを通じて暗示される。

そうした模範的なグレンディニング家の後継としての意識の兆しは、ピエールの話し方にも読み取れる。

“Now Sergeant Dates, help hither your mistress’ plate. No?—nothing but the crumbs of French rolls, and a few peeps into a coffee-cup—is that a breakfast for the daughter of yonder bold General?”—pointing to a full length of his gold-laced grandfather on the opposite wall. “Well, pitiable is my case when I have to breakfast for two. Dates!” (17)

ピエールが召使のデイツに命じ母にハト料理を取り分けようとする、このシーンにおいて、デイツを「軍曹」、また、母メアリーを「勇壮な將軍の娘」と呼ぶピエールのおどけた言葉には、軍隊のレトリックが散見される。また、ピエールの向かいの壁には、かつてインディアン戦争で勝利し、サドル

メドウズを築き上げた祖父の肖像画が架かっているが、こうした軍隊のレトリックを通じて、將軍であった祖父の威光を、ピエールの意識に垣間見ることができる。食堂に架けられた祖父の肖像画を前に食事をすることによって、ピエールは、母メアリーだけではなく、彼が崇める祖父とも食卓を共有しているように思われる。また、“I have to breakfast for two” とハト料理を二人分食べなければならないことを、おどけながら嘆くピエールの姿が描かれているが、前置詞の“for”を「代理」の意味でとるならば、「二人に代わって」と読むこともでき、「二人」とは対面に位置するメアリーと肖像画に描かれた祖父であるとも考えられる。この三人の会食という意識は、この会話の直後で、ピエールがドイツに求めるミルクが、「三杯」(18)であることにも反映されている。ピエールの意識のなかでは、食卓は彼自身と母メアリーと祖父の三人で共有されている。祖父と、母、そして後継としてのピエールという家父長制における血統的な、三位一体の“communion”としての意味が、この朝食に含有されているのである。メアリーに「乳飲み児(milk-sop)」と窘められるピエールは、文字通りグレンディニング家の「ミルク」を滋養とし、それによって、彼の自己は形成されるのだ。

以上の食事のシーンにも描かれているように、サドルメドウズにおいて、ピエールは「卓越した食欲」(16)の持ち主として強調される。語り手は、彼の食欲は「正当な王家の美質」であり、「一人前の男として、また紳士としての資質を証明する」と述べる(17)。“gentleman”という言葉は、グレンディニング家の家長としての資質をあらわす言葉として、母メアリーによって何度も繰り返される。「ピエールを紳士として、クリスチャンとして、また良心的な領主として育てることに最大限尽力」するメアリーは、「ピエールを次世代のグレンディニング・ヒーローに育てることによって、先祖代々の遺産を支えている」、とウィン・ケリーは分析する(Kelley 100)。ピエールの“gentlemanhood”，あるいは「グレンディニング・ヒーロー」像は、母メアリーによって培われると同時に、ピエールの食べる行為を通じて形成される。

また、ケリーの指摘する「クリスチャン」としての、ピエールの自己形成

も、彼の食べる行為を通じて読み取れる。ピエールは、キリストの血と肉であるパンとワインを食べる聖餐の儀礼を 16 歳の時に受ける。聖餐は、ノースロップ・フライが分析するように、聖体を食べることによって、その者は「キリストの一部となると同時に、キリストを内に宿す存在となる」ことを意味する (Frye 42)。「食べる行為」によって主体は変容する。すなわち、食べるものが、「食べられる」ものに、また、食べものが、「食べる」ものになる、逆説的互換関係の食のメタファーの元型が聖餐に隠れている。

話を『ピエール』にもどし、テキスト内におけるピエールが受ける聖餐に関する描写を考察するために、語り手の言及を読みたい。

Nor had that pride and love which had so bountifully provided for the youthful nurture of Pierre, neglected his culture in the deepest element of all. It had been a maxim with the father of Pierre, that all gentlemanhood was vain; all claims to it preposterous and absurd, unless the primeval gentleness and golden humanities of religion had been so thoroughly wrought into the complete texture of the character, that he who pronounced himself gentleman, could also rightfully assume the meek, but kingly style of Christian. At the age of sixteen, Pierre partook with his mother of the Holy Sacraments. (6-7)

ここには聖餐を受ける経緯として、父ピエール・グレンディニングの金言について言及されているが、それは「紳士たるもの、敬虔であれ」と要約できるだろう。こうした父の金言が、ピエールの「滋養」となり、ピエールの「人格の完全な織物」の一部となる。そして、「滋養」という言葉の字義通り、ピエールは聖餐の儀礼を受けることになるが、ここで注意しなければならないのは、ピエールが受ける聖餐は、宗教的意義を有する儀礼というより、むしろグレンディニング家の「紳士らしさ」を獲得するための儀式であることである。メアリーは、キリスト教を「紳士化させる」ものとして重ん

じ、さらに「もし聖餐を受けなければ、だれも完全な紳士となり得ず、自身の食卓に威厳をもって取り仕切ることはできない」と考える (98)。ピエールが聖餐を受けた経緯については、母メアリーの強い願望によるものと考えるのが自然だが、そのメアリーが考える聖餐は極めて世俗的であることが、彼女自身の聖餐に対する考えから浮き彫りになる。この意味において、ピエールの受ける聖餐は、本来の神聖な宗教儀礼から峻別されなければならない。

聖餐は、「紳士」すなわちケリーの指摘するところの、「グレンディニング・ヒーロー」となる儀礼にすぎない。それはピエールにとって神聖なものではなく、むしろグレンディニング家の血統的な契約としての意味を担う。その契約によって、ピエールは「グレンディニング・ヒーロー」像を内に宿す存在となるとともに、またその血統の中へと取り込まれるのである。マイケル・ポール・ローギンが『「乳飲み児」であるピエールは母によって支配される」(Rogin 164)と指摘するように、こうした自己の形成は、ピエールの自立を目指すものではなく、代々受け継がれていく理想像のなかへ彼を押し込めることを示唆する。

しかし、廃嫡された姉と名乗るイザベルの存在によって、ピエールのなかに埋め込まれた「グレンディニング・ヒーロー」像は虚像であることが暴かれ、それにともない、彼の自己も脅かされることになる。ピエールがイザベルを妻に娶りニューヨークへ向けてサドルメドウズを発つストーリーの転換は、ピエールの「グレンディニング・ヒーロー」像の解体のはじまりを意味する。とりわけイザベルとピエールの食事のシーンは、その転換を示唆している。“Give me the cup; hand it me with thine own hand. So:—Isabel, my heart and soul are now full of deepest reverence; yet I do dare to call this the real sacrament of the supper.—Eat with me” (162). ブラウンは、ピエールのイザベルとの「儀式的な食事」は「ピエールの乳離れを意味し、反センチメンタルな新たな生の構築へと導くことをあらわしている」(Brown 149)、と指摘する。ピエールのグレンディニング家からの離脱、すなわちセンチメンタルから「反センチメンタル」なストーリーへの転機

が、食事のシーンを通じて示唆される。ピエールがイザベルとの食事を「真の聖餐」と呼ぶように、このシーンは、ピエールが16歳の時に受けた聖餐とパラレルであるとみなすことができるだろう。この後、牧師のフォルスグレイヴの家を訪ねたピエールは、フォルスグレイヴの偽善性を見抜き、ピエールが信奉していた「クリスチャニティ」が欺瞞に満ちたものであることを悟る。ピエールが16歳の時に受けた「聖餐」は、イザベルとの食事によって上書きされたのである。イザベルとの「真の聖餐」は、ピエールがイザベルを姉として認知する契約であるとともに、ピエールの自己を形成する「クリスチャニティ」の排斥をも意味する。それによって、彼の自己の解体は、一層助長されるのである。

### 3. 「食べる／書く」

食べる主体は、食べものを取り込むと同時に、食べものによって、変容させられる。そうした「食べる行為」が含意する、主体への「刷り込み」が、テキスト内で「書く行為」に喩えられている。『ピエール』には、「紙」や「織物」のメタファーが多用されており、とりわけ、小説冒頭部における、ピエールに姉がいないことに関する語り手の言及に散在している。“So perfectly to Pierre had long seemed the illuminated scroll of his life thus far, that only hiatus was discoverable by him in that sweetly-writ manuscript. A sister had been omitted from the text” (7). 語り手はピエールの人生を、「巻物」や、「芳しく書き上げられた原稿」、「織物」に擬え、姉がいないことを「脱字」に喩えている。まるで、ピエール自身が「紙」であるかのようだ。また、先述した聖餐に関する語り手の言及においても、ピエールの自己は、「人格の完全な織物 (the complete texture of the character)」(6) になぞらえられる。父の金言がピエールの「滋養」となることに鑑みれば、そこから「食」と「書」のモチーフの連動を読み取ることができ、字義通り「人格」という意味で用いられている“character”という語に、「文字」という意味も見いだすことができよう。「織物」や「紙」に

「文字 (character)」が書かれるように、ピエールの「人格 (character)」は形成される。つまり、ピエールはサドルメドウズにおける、父や祖父が築き上げた遺産と歴史を背負う「グレンディニング・ヒーロー」のイメージを「滋養」として「食べる／書かれる」ことによって、“Pierre Glendinning”として“characterize”されるのである。

そうしたピエールの自己が、イザベルとの会食によって解体されるプロセスへと向かうことについては先に指摘したが、イザベルとの面会の会話において、メルヴィルは、“Pierre Glendinning”の、文字通りの解体を仄めかしている。昔、農家に引き取られていたイザベルは、そこで彼女が「父さん」と呼んでいた人物のハンカチを偶然手にし、そのハンカチに“Pierre Glendinning”というサインが書かれているのを発見する。

“I folded it [the handkerchief] in such a manner, that the name was invisibly buried in the heart of it, and it was like opening a book and turning over many blank leaves before I came to the mysterious writing, which I knew should be one day read by me, without direct help from any one. [. . .] I soon mastered the alphabet, and went on to spelling, and by-and-by to reading, and at last to the complete deciphering of the talismanic word — Glendinning. I was yet very ignorant. *Glendinning*, thought I, what is that? It sounds something like *gentleman*; —Glen-din-ning;—just as many syllables as *gentleman*; and—G—it begins with the same letter; yes, it must mean *my father*.” (146–47)

農家の者達による呼称“gentleman”と、ハンカチに書かれていた“Glendinning”の音節の数が同じであるということ、またそれらが“G”というアルファベットで始まることから、イザベルは父の名前がピエール・グレンディニングであることを確信する。しかし、この逸話は、イザベルの意識のなかで、メアリーが固執するような“gentleman”としてのグレンデ



インギン家の家長としての特性を、父ピエール・グレンディニングに認めたことを意味しているのではない。「私はまだまだ無知だったのです」と打ち明けるイザベルにとって、“gentleman”という言葉は、“Glen-din-ning”という名前と同様に、細分可能のアルファベットの羅列にすぎないのである。ここでは、“Glendinning”と“gentleman”の、意味内容の次元におけるリンクが示唆されているのではなく、むしろ、音節の数と、アルファベットの次元におけるアナロジーのみが浮き彫りになる。グレンディニング家の家長の特性である“gentlemanhood”は、シニフィエを喪失したシニフィアンにすぎない虚無なものであることが、ここで仄めかされているのである。

音節で区切られた“Glen-din-ning”について、エリザベス・デュケットは、「ここでメルヴィルは‘Glendinning’を構成分子にバラバラにしている。そうすることによって、意味を構成する音、音節、文字に対し、メルヴィルは読者に思考を強いている」(Duquette 120)と指摘する。デュケットが主張するように、『ピエール』には、音節やアルファベットの次元での文字の細分化と、それによる別の意味を生成する効果を狙った書き方が散在している。たとえば、ピエールの従兄弟であり、また「世襲的な音節を洗礼名として担う」(287) グレン (Glen) の名前もまた、“Glendinning”という名前を細分化したものである。そして、ピエールを失ったグレンディニング家の後継となる存在となることを、その名前は予表する。また、父ピエール・グレンディニングの肖像画に描かれる父のネッカチーフには“P. G.”というイニシャルが刺繍されており、ここにもイザベルが実践してみせた、文字の細分化のモチーフを読み取ることができる。ピエールと「書物」のメタフォリカルな関係に加えて、先述の引用において、“Pierre Glendinning”というサインの書かれたハンカチが「書物」に喩えられていることに鑑みれば、ネッカチーフの“P. G.”という刺繍から、“page”という意味も喚起される<sup>2</sup>。あるいは、ピエールの「食べる」ものとしての主体を考慮すれば、“Glendinning”の、後半の“dinning”というアルファベットの並びと、「食事」を意味する“dining”とのアナロジーも見えてとれよう。

いずれにせよ、ハイフンによって分断される“Glen-din-ning”は単なる呼称の細分化、あるいは「文字 (character)」の並びの分断をあらわすだけではなく、「人格 (character)」, つまりピエールにとっての「自己」の解体をも暗示する。メルヴィルは、ピエールの名前が担うグレンディニング家の歴史的な正統性や、それを形容する“gentlemanhood”の虚無化を仄めかしているのである。

これまで見てきたように、ピエールは「書かれる」存在であり、イザベルとの出会いによって自己は解体へと向かう。サドルメドウズからニューヨークへ向かい、いわゆる「ルビコン川」を渡ったピエールは、「これより棄てられたピエールに親はない、過去もない。そして、未来は万人にとって白紙だ」(199)と述べる。自身の放逐は、ピエールにとって過去との断絶、すなわち自己の目覚めの第一歩となる。ワイ・チャー・ディモクが「自己犠牲というよりも、むしろ自己形成」(Dimock 144)の物語として『ピエール』を位置づけているように、ピエールの内面において、イザベルを妻とし保護するものとしての外向的な自己犠牲の意識よりも、むしろ過剰なまでの自意識が際立つようになる。そうした内向的な意識は、自らの手による自己の形成へと繋がっていく。

ニューヨークへ移ったピエールは、小説の執筆に着手する。語り手は、ピエールの執筆について次のように述べる。

Two books are being writ; of which the world shall only see one, and that the bungled one. The larger book, and the infinitely better, is for Pierre's own private shelf. That it is, whose unfathomable cravings drink his blood; the other only demands his ink. But circumstances have so decreed, that the one can not be composed on the paper, but only as the other is writ down in his soul. And the one of the soul is elephantinely sluggish, and will not budge at a breath. Thus Pierre is fastened on by two leeches;—how then can the life of Pierre last? Lo! he is fitting for the highest life, by

thinning his blood and collapsing his heart. He is learning how to live, by rehearsing the part of death. (304)

この引用では、語り手はピエールが「二冊の本」を書いていると述べる。一冊は、ピエールが実際にインクで書いている作品であり、もう一冊は、ピエール自身に刻み込まれるものである。「ピエールはみずからのアルファとオメガになろうとした」(261)、と語り手は述べる<sup>3</sup>。ピエールは、彼自身の「白紙」(199)のページに、「アルファとオメガ」すなわち「文字(character)」を刻み込むのである。ピエールの執筆を助長するのは「悲しくも世間が蔑ろにする真理を世に出すことに対する燃え盛る願望」(283)と、語り手は述べる。「真理」をないがしろにする「世間」とは、ピエールにとってサドルメドウズが象徴する、虚飾によっていどられた欺瞞の世界であり、「真理」とは、その欺瞞に抗い「神が授け賜うたキリスト」(106)と語り手が擬えるピエール自身が体現するものである。彼の「書く行為」は、自己を形成する行為である一方で、これまで彼の自己を形成してきた「グレンディニング・ヒーロー」像を解体する行為でもある。つまり、ピエールが「書く」ことによって破壊するものとは、父ピエールと母メアリーとの間に生まれ、その血を受け継ぐ彼自身であるのだ<sup>4</sup>。

#### 4. 「食べられる／書かれる」

ピエールは「朝の8時半から夕方4時半まで」(303)部屋に引きこもり、小説の執筆に没頭する<sup>5</sup>。語り手が、ピエールを「無理やりでなければ、何も食べられない」、「あらゆる食べ物を嫌う、飢えた者」(305)であると述べるように、小説を書き進めるにつれて、ピエールに付与されていた大食漢の特性は消え去り、逆に食を拒む様子が前景化される。さらに、語り手はピエールの執筆に関して次のように述べる。

Who shall tell all the thoughts and feelings of Pierre in that

desolate and shivering room, when at last the idea obtruded, that the wiser and the profounder he should grow, the more and the more he lessened the chances for bread [. . .]. But the devouring profundities, now opened up in him, consume all his vigor [. . .].  
(305)

ピエールの「深遠な思考」は、ピエールからパンを食べる機会を徐々に奪っていくだけではなく、彼自身の「活力を蝕んでいった」と語り手は述べる。ストーリーの序盤で見せたピエールの「食べる」主体は、「食べられる」客体へと変容する。この変容は、乾布摩擦をするピエールの習慣に如実にあらわれている。

The gods love the soul of a man; often, they will frankly accost it; but they abominate his body; and will forever cut it dead, both here and hereafter. So, if thou wouldst go to the gods, leave thy dog of a body behind thee. And most impotently thou strivest with thy purifying cold baths, and thy diligent scrubbings with flesh-brushes, to prepare it as a meet offering for their [the gods] altar. (299)

ここでは、ピエール自身が「食べもの」となることが暗示される。「食べる」ものから、「食べられる」ものとなるピエールの主体の変容が、ストーリーの転機を唆する表象の一つとして浮き彫りになる。「書くことへの渴望」が「ピエールの血をすする」(304)、と語り手が述べているように、ピエールは「己の深遠な思念」によって内側から蝕まれる。「書く」ことによって、ピエールは「食べられる」のである。

サミュエル・オッターは、「精神が紙へと変質する一方で、インクは血に流れる。インクが濃くなることによって、血は薄れて」いき、ピエールの「激情は一種の死をもたらす輸血となる」(Otter 249)と論じる。また、アナグラムの関係にある“ink”と、“kin”が、『ピエール』において交換可

能の関係であることを論じる古井義昭は、「ピエールの黒いインクと血（ink /kin）は、彼が崇めていた先祖が、実際には地獄のような黒い血族であることを示している」（Furui 12）と指摘する。彼らが指摘するように、姉を廃嫡した父、また理想郷サドルメドウズに隠されたインディアン戦争の流血の歴史、またピエール自身の姉イザベルとの近親相姦、こうしたグレンディニング家の血族の背後に潜む、暗い実像が黒いインクとなって、ピエールの血を蝕むのである。ピエールの書く行為とは、「グレンディニング・ヒーロー」として形成された自己を刻み、破壊する行為であり、それは自身を「喰らう」行為へと直結するのである。ピエールの「書く」小説は、“Pierre Glendinning”を「喰らいつくす」ことによって完成するのである。

## 5. 「死のミルク」

従兄弟のグレンを殺害後、ピエールは監獄でイザベルと抱擁し、「汝の胸に、赤子のいのちは宿らぬ。汝と我にとっての死のミルクを宿しているのだ」と最後の言葉を放つ。その後、二人は服毒自殺をし、ストーリーに幕が降ろされる。ピエールは毒薬を「死のミルク」であるという。ピエールの亡骸を見た友人ミルソープは「黒い血管が破裂したのだ」（362）と叫ぶ。彼の叫びは、ピエールの血管を流れる血の黒さとインクのアナロジーを喚起させる。それならば、「死のミルク」は、イザベルの存在が体现するグレンディニング家の黒い「インク／血」の表象であると考えられないだろうか。「食べる」ものであり「食べられる」もの、また「書く」ものであり、「書かれる」ものという、ピエールの自己消耗的な状態が、生きるための営みである「食」の目的を、「死」へと反転させる服毒自殺に凝縮されているのである。

以上のように、ピエールが、食べる存在から、食べない存在へと移行し、かつ比喩的な次元において、「食べもの」となることがストーリーを通じて仄めかされている。また、そうした「食」のメタファーは、「書くという行為」と接続する。ピエールの作家としての「書く行為」は、みずから「文

字 (character)」を書き込むことでもあり、「人格 (character)」, すなわち彼にとっての自己の構築を目指す行為となる。しかし、ピエールのこうした“character”の構築は、彼の本来の健康的な身体と過去の自己を解体する行為となる。「書くもの」であり、同時に「書かれるもの」である彼は、同時に「食べもの」となる。そうした自己消耗的な状態は、「死のミルク」を体内に取り込むことによって完結する。グレンディニング家の「乳飲み児」であったピエールが、最終的に父の棄子である姉の「死のミルク」で服毒自殺をするという「食」の円環構造は、この物語が孕む悲痛なアイロニーを示唆しているのである。

### Notes

<sup>1</sup> Elliot 191 を参照。

<sup>2</sup> Renker 83-84 を参照。

<sup>3</sup> 「アルファとオメガ」に関して、メルヴィルはヨハネの黙示録 1 章 8 節から引用していると考えられる。“I am Alpha and Omega, the beginning and the ending, saith the Lord, which is, and which was, and which is to come, the Almighty” (Rev. 1. 8).

<sup>4</sup> タラ・ペンリーは、ピエールの悲劇は「自身の似姿へと飛び込む」ことであると論じる。さらに「(棄てられ、疎外された) ロマン主義的な男性として、自己を創造することによって、その者たちは、両親や他の外的なものから生み出されることのないアイデンティティを求めて、自身の似姿を凝視することになる」(Penry 229-30) と分析し、ピエールの自己破滅性にナルキッソスの悲劇性を読み取っている。

<sup>5</sup> ピエールが見せる拒食は、『ピエール』執筆時のメルヴィルのそれと重なる。メルヴィルの友人サラ・モアウッドが<sup>5</sup>、ジョージ・ダイキンクに宛てた 1851 年 12 月 28 日付の手紙の中で、「(メルヴィルは) 暗くなる夜まで部屋に引きこもり、それから 1 日で初めてご飯を口にする」(Howard 185) と書いている。またジョン・アップダイクは、モアウッド夫人の手紙に触れて、「メルヴィルの知人は、鬱状態と躁鬱状態を繰り返すメルヴィルの気分に気づいていた。創作が突発的なほとばしりを見せる最中に、こうした気分の移り変わりは起こりうるものである」(Updike 146) と述べる。

### Works Cited

Brown, Gillian. *Domestic Individualism: Imaging Self in Nineteenth-Century America*. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1990.

- Dimock, Wai-Chee. *Empire for Liberty: Melville and the Poetics of Individualism*. Princeton: Princeton UP, 1991.
- Duquette, Elizabeth. "Pierre's Nominal Conversions." *Melville and Aesthetic*. Ed. Samuel Otter and Geoffrey Sanborn. New York: Palgrave Macmillan, 2011. 117–35.
- Elliot, Emory. "'Wondering To-and-Fro': Melville and Religion." *A Historical Guide to Herman Melville*. Ed. Giles Gunn. New York: Oxford UP, 2005.
- Frye, Northrop. *Myth And Metaphor: Selected Essays, 1974–1988*. Ed. Robert D. Denham. Charlottesville: UP of Virginia, 1990.
- Furui, Yoshiaki. "'No One Is His Own Sire': Dead Letters and Kinship in Melville's *Pierre*." *The Journal of the American Literature Society of Japan* 8 (2009): 1–17.
- Gigante, Denise. *Taste: A Literary History*. New Haven: Yale UP, 2005.
- The Holy Bible: King James Version*. Oxford: Oxford UP, 1985.
- Howard, Leon. *Herman Melville: A Biography*. Berkley and Los Angeles: U of California P, 1951.
- Kelley, Wyn. "Pierre's Domestic Ambiguities." *The Cambridge Companion to Herman Melville*. Ed. Robert S. Levine. New York: Cambridge UP, 1999. 91–113.
- Melville, Herman. *Correspondence*. Ed. Lyn Horth. Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library, 1993.
- . *Pierre: Or, The Ambiguities*. 1852. Ed. Harrison Hayford, Hershel Parker and Thomas Tanselle. Evanston and Chicago: North Western UP and The Newberry Library, 1996.
- Otter, Samuel. *Melville's Anatomies*. Berkeley: U of California P, 1999.
- Penry, Tara. "Sentimental and Romantic Masculinities in *Moby-Dick* and *Pierre*." *Sentimental Men: Masculinity and the Politics of Affect in American Culture*. Ed. Mary Chapman and Glenn Hendler. Berkley and Los Angeles: U of California P, 1999. 226–43.
- Renker, Elizabeth. *Strike through the Mask: Herman Melville and the Scene of Writing*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1996.
- Rogin, Michael Paul. *Subversive Genealogy: the Politics and Art of Herman Melville*. Berkeley: U of California P, 1979.
- Tally, Robert T. Jr. *Melville, Mapping and Globalization: Library Cartography in the American Baroque Writer*. London: Continuum, 2009.
- Updike, John. *More Matter: Essays and Criticism*. New York: Alfred A. Knopf, 1999.